

2019年度  
関西学院大学ロースクール  
D日程

一般入試（法学未修者）

論文問題

《10:00～11:30》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

## 【論文問題】

問題文の（A）および（B）を読んで、以下の〔設問1〕および〔設問2〕に答えなさい。

### 〔設問1〕

問題文（A）では、「記憶というのはビデオテープに撮影された過去の映像のようなものである」というテープの比喩には二つの落とし穴があると指摘されている。問題文Aの著者によると、それはどういう落とし穴であると考えられているか、450字以内で説明しなさい。

### 〔設問2〕

問題文（A）で説明されている状況的認知論的アプローチにより記憶の本体を捉えて記憶の生成過程を読み解く立場からは、問題文（B）で示されている「うその関係モデル」がよく説明できると考えられる。状況的認知論の立場に立って「うその関係モデル」の成り立ちを説明するとどうなるか、450字以内で説明しなさい。

## 問題文 (A)

### 1. 記憶＝ビデオテープ論

まず記憶について人がふつうに持っていると思われる像を、以下のような比喻イメージから考えてみようと思う。「記憶というのはビデオテープに撮影された過去の映像のようなものである」というのがその比喻である。自分の体験がビデオテープに収められ（記録：覚えること）、頭の中にしまい込まれる（保持：覚えておくこと）。そして必要に応じて、しまわれたテープが探し出され（検索：思い出そうとすること）、当時の体験が再び映し出される（再生：思い出すこと）。

これはわかりやすい比喻で、とても便利であり、この比喻に違和感を抱く人は少ないであろう。だがそのわかりやすさに第1の落とし穴がある。そしてこれまで心理学者は記憶のこの落とし穴を明らかにすべく、さまざまな角度から取り組んできた。この比喻に含まれるのは、「記憶は過去のできごとの正確な写しであり、想起はその写しの再生である」という考え方である。しかし、「覚える（記録）段階」「覚えておく（保持）段階」「思い出す（再生）段階」という、記憶のすべての段階で、実は変容が起こる。

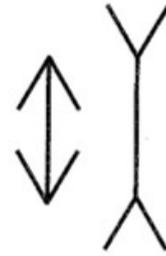


図 10-1 ミューラー＝リヤーの錯視図形

まず見たものを覚えるという段階を考えてみる。知覚心理学が明らかにしてきたように、私たちが見るものは、いわゆる物理的な外界の事物そのものではない。たとえばミューラー＝リヤーの錯視図形を考えればわかる（図 10-1）。物理的には同じ長さの線が、私たちの目にはどうしても異なる長さに見えてしまう。また網膜に写る外界の像は二次元の像にすぎないが、私たちは網膜に与えられた情報を加工しながら、そこに奥行きを持った三次元の世界を見る。私たちの「心」は与えられた刺激を自分なりに解釈し、そこに新しい意味を見いだすようにつくられているのである。その解釈が時として過剰になった時錯視が起こる。覚えるという作業も、決して外界をそのまま写し取る作業ではない。それは外界を理解し、理解された外界を取り込む作業と言える。当然そこにある「ゆがみ」が伴うことになる。

次に覚えておく段階を考えてみる。脳に入った情報あるいは新しく獲得された知識（記憶内容）は、脳の中でおとなしくしているわけではない。それはすでに存在している知識や後から入ってくる知識と関係づけられ、まとめあげられて体制化される。この体制化の過程で、知識はさらに新しい意味を獲得していくことになり、そこに変容が起こる。記憶内容はここでも「ゆがむ」のである。

最後に思い出す段階である。同じものを見た後でも、後にそれを人から聞かれて思い出し、説明する場合、聞かれ方によって思い出された内容が変化する場合がある。たとえばロフタスとパルマーの実験で、被験者はビデオで車の事故のシーンを見せられた。そして後からその際の車の速さ思い出してその値を推測してもらおう。すると、「車が激突した時に、どれほどの速さで走っていたか」と尋ねられる場合と、「車がぶつかった時に、どれほどの速さで走っていたか」と尋ねられる場合では、同じシーンを見ているにもかかわらず、測定値にちがいが出てしまう。

したがって、記憶は過去の体験そのままが保存されるものではなく、さまざまな段階で、さまざまな要因によって変容するものだ、というのが心理学の常識である。だとすれば、テープの比喩には少し問題が起こることになる。記憶は見たものそのままではないからである。だが、テープの比喩は意外に強固に私たちを縛り続ける。この変容という現象も、実はテープの比喩でかなりのところまでは説明できてしまうのである。

## 2. 「いま＝ここ」に立ち上がる過去

まず、記銘時の変容を考えてみよう。するとビデオの記録にも失敗はあることがわかる。たとえばカメラの調子が悪い場合には、そもそもレンズが歪んでいる場合もあるし、受光部の性能に問題がある場合もある。この場合、テープには正確な情報が記録されないことになる。保持の間の変容についてはテープの劣化、保存場所の混乱などの比喩が使える。検索のまちがいは取り出すテープのまちがいであるし、また誘導質問などで別の記憶や知識が紛れ込まされる現象も、切れ切れになったテープの再編集時の誤りとして説明できる。記憶が薄れるということは、テープの劣化として説明できるし、記憶の消滅や忘却はもちろんテープの著しい劣化、紛失である。

ここまで比喩を拡張した場合にはそれに反対する心理学者の数はかなり減るであろう。実際、誘導によって誤った記憶が再生される現象をめぐり、それは検索のまちがい異なる記憶が引き出されるのか、それとももともとの記憶が変容したのか、ということに関する論争があるが、前者の立場はテープの比喩で十分表現可能である。

過去の体験が何らかの形で現在に痕跡を残しているということは、おそらく誰も否定できない事実であろう。その痕跡に時間の経過その他の理由で変化が生じていたとしても、それが痕跡であることに変わりはない。たとえば本に残された茶色いしみは、昔コーヒーをこぼしたことの痕跡である。同じようにテープの記録は過去に存在した光景の痕跡であり、脳の神経回路に残されたパターンは、過去の経験の痕跡である。この痕跡がそれ自体すなわち記憶の本体であるという考え方を取る限り、私たちはビデオの比喩から本質的には逃れることができない。これが「記憶は実は変容する」という第1の落とし穴よりも、さらに深く広い、第2の落とし穴である。

心理学の中でこの第2の落とし穴に正面から取り組む議論が、認知心理学を中心に現在広く行なわれるようになってきた。そのような試みを一般に状況的認知論アプローチといった呼び方で表す。記憶現象に限らず、それまでの認知心理学が、頭の中でどのような情報処理が行なわれているかを追求するものであったのに対し、この新しいアプローチは主体を含めた状況全体を対象とし、その状況の中でどのように心理的現象が成立し、展開するかを追求する。

そのような新しい立場からは、旧来の認知心理学の姿勢は「表象主義」ということばで批判される。人間が何かについて理解し知識を形成し概念を獲得するということは、その対象を頭の中に写し取ってそのモデルを形成すること、つまりは対象についての内的「表象」を持つことだという発想が、そのパラダイムの基本になっていたからである。状況的認知論はこの外界から自立した表象を認めない。

当然記憶についてもこのアプローチではそれまでとは異なる視点を取る。たとえば道を覚えるという現象について、旧来のパラダイムでは人がその道筋についての何らかの表象を頭の中に作り出し（それが記憶することである）、その表象と照らし合わせて正しい道を思い出すといった理解の仕方になる。これに対して状況的認知論の考え方ではそのような記憶表象があらかじめしま込まれていると考えない。その現場に立つなど、ある状況を与えられることで、状況と主体が相互作用を起こしてその場に「記憶」が生成し、「これが正しい道だ」という判断が生ずると考える。

その差をシステムということばで説明するとわかりやすいかもしれない。認知というものを、自己や対象など、世界についての理解のシステムだと考えよう。そうすると、表象主義においてはそのシステムは頭の中に成立することになる。表象はその内的なシステムを構成する要素であり、内的な心理空間の中で成立し、機能する。これに対して状況的認知論ではそのシステムが行為する身体やその外部も含めた状況の中に成り立つと考える。

それゆえ記憶の本体が何かということについても、この2つの立場はまったく異なった理解に到達することになる。表象主義では記憶とはすなわち過去に関する表象である。記憶が再生されるのは現在のできごとであるにせよ、記憶は表象の形で保存された過去が現在に再現されることである。これに対して状況的認知論では、記憶はまさに「いま＝ここ」に立ち上がる過去であるということになる。仮に記憶表象というものの存在を認めたとしても、その表象は状況に依存してまさにいま、ここで生成された過去像なのである。

表象主義的な見方からは、記憶は過去から語られ、これに対して状況的認知論では現在から記憶を語るという転換を行なう。このような転換によって初めて私たちは記憶＝ビデオテープの映像という比喻のパラダイムを本質的に離れ、状況によって多様な姿を見せるダイナミックな記憶像に迫る可能性を手に入れる。私たちに残された過

去の痕跡はそれ自体が記憶なのではない。その痕跡を含む状況が過去のものとして立ち上げたもの、それが記憶なのである。痕跡はそこでは素材の一部にすぎない。私たちの実験も、このような視点を共有するものと言ってよい。

### 3. 社会的な記憶

記憶が状況的に成立するものだと認めたとして、次に問題になるのは、その状況とは具体的には何かということである。私たちが実験を構成する際にもっとも心を砕いたのはこの点であった。そして私たちの実験パラダイムに結晶した認識を一言で表現するとすればこういうことになろう。記憶を個人の現象としてではなく、社会的な現象として扱い、読み解くことである。記憶が成立する場は個人の頭の中ではない。その個人が置かれた状況あるいは場である。そしてその場には複数の個人が含まれており、その個々人の社会的な相互作用の中に記憶が生み出されていく。したがってそこで生み出される記憶は、個人が生成したものではない。そこに成立した社会的相互作用そのものが生成したものなのだ。やや比喩的に言えば、たとえその記憶を直接に物語るのが個人であったとしても、それはその社会的相互作用の場が個人の口を通して語っているのだと言ってもいい。

<以下略>

山本登志哉編著『生み出された物語』（北大路書房，2003年）より抜粋。なお、原文の文献引用箇所は省略した。

## 問題文（B）

### うその個体モデルと関係モデル

うそは誰にとってもなじみ深い現象であるにもかかわらず、案外この現象について私たちは固定的な観念に囚われている。つまり「うそは自分勝手な思いで、自分自身の利益のために、自分の側から積極的に他者をだますものだ」という観念である。うそは泥棒のはじまりなどといってうそをたしなめる言い方のなかに、そのことはよく表れている。たとえば相手をだまして利益を得ようとしたり、自分の失敗を隠して相手にさとられないようにごまかしたりするうそが、その典型例としてイメージされる。そこでは、個体の側の都合や欲求がさきにあって、それに主導されるかたちでうそがたくらまれるのだと考えられている。これを便宜的に「うその個体モデル」と呼んでおく。

なるほどこのモデルにぴったりあてはまるうその例も少なくない。しかしそれは人間のうそ現象の一部にすぎないことは、少し視野を広くとればすぐに気づく。人間は相手を喜ばせるのが大好きな生き物である。また相手が悲しむのをできるだけ避けようともする。そこで、ほんとうはそう思っていないのに相手をほめちぎったり、相手がショックを受けるような事実をあえて隠して安心させたりする。この愛他的なうそは個体モデルからあきらかにみ出す。ただこの種のうそでも、もっぱら相手のためだとはいいきれない。

たとえば身内が胃がんとわかって、それを告知せず、ただの胃かいようだといってうそをつくとき、それは表向きは相手をむやみに苦しめたくないとの思いのゆえである。しかし同時に、苦しむ相手を見たくないという自分の側の思いのゆえでもある。それはどちらの利益のためのうそだというより、むしろ関係のなかのうそだといったほうがよい。

そうしてみれば、まったく利己的なうそにみえるものでも、相手によく思われたいというたぐいの関係意識が強く背後にあることが少なくない。自分の失敗を隠すうそ



アッシュの実験で用いられた刺激図の一例（H. F. ハーロウ『愛のなりたち』ミネルヴァ書房、1978年、198頁より）

などは、自分の利益を守るというよりも、相手から悪く思われたくない、非難されたくないという相手への意識が先導していることが多いものである。

あるいは実験的に仕組まれたこんなうそもある。8人の人たちを一緒に同じ部屋に入れて、まず一本の線分（図の「刺激」）を全員に見せる。ついでその線分を隠したうえで、3本の線分A、B、Cを見せて、どれがさきに見せたのと長さが同じかを聞く。およそ微妙な差ではなく、たとえば左図の

場合、誰がみてもBが正解であることがわかる。ところが実は同席する8人のうちの7人はサクラで、実験者の指示どおりに答えることになっていて、ほんものの被験者は1人だけである。答える順番は決まっていて、サクラの7人がさきに答え、最後に被験者が答える。もちろん被験者はこの作為を知らず、自分は8人の被験者の1人だと思っている。さて最初の数回は、サクラもみたまに答えることになっていて、したがって8人の答えはおのずと一致する。その意味でまことに退屈で、つまらない実験にみえる。ところがある回から、サクラは実験者の指示どおりに答えをまちがいはじめる。たとえば正解はあきらかにBなのに、あるとき最初の人Aと答える。それを聞いて真の被験者は「えっ」と思う。ところが次の人もAと答える。信じられない。さらに次の人も、次の人も……。結局、自分より前に答えた7人はいずれもAだと答える。とうとう自分の番になったとき、その被験者は見たとおりに正解を答えることができるかどうか。おおくの被験者が冷や汗が流れる思いのなかで、自分もAと答えてしまう。こうした場面におかれたとき、人は自分のほんとうの判断を偽って、周囲の人々の答えに同調してしまうのである。

この同調実験は、うその実験でもある。その結果からあきらかなように、人は他者との対立を好まず、他者に同調して自分を偽ることがある。周囲の誰もが一致して確信しているとき（少なくともそうみえるとき）、その確信の表明されるその場は一つの強力な磁場として、異なる意見に圧力を及ぼす。その磁場にさらされて陥るうそは、およそ個体モデルにはおさまらない。

この実験は一つの極端例である。しかし自分自身の利害にかかわらず、純粹に関係のレベルで人がうそをつくことがあることを端的に示している点で興味深い。うそが関係の磁場のなかで生まれるのである。

うそが関係の場のなかで生まれるというモデルは、あらゆるうそにあてはめることができる。自分の側の利益だけを全面に出してつく詐欺的なうそは、自分の側が主導権を握って、関係の場を能動的に支配しようとする一つの極端例であり、いまの同調実験でのうそなどは、完全に関係の側に主導権を握られた受動のうその極端例である。あらゆるうそはこの両極のあいだに分布するといつてよい。これが「うその関係モデル」である。

### あばかれるうそ、支えられるうそ

うその関係モデルのなかで、自分の側がその場の主導権を握り、その場を左右する能動のうそと、反対に関係の場ないしそのなかの誰かに場の主導権を握られて、その場に左右されるかたちでつく受動のうそとのあいだには、うそをついたあとの経緯に決定的な差がある。

前者の場合、うそは自分の利益のためにつき、結果としてそのうそはつかれた相手

に何らかの不利益、不都合をもたらす。平たくいえば、そこでは一方がだまし、他方がだまされるという〈だます—だまされる〉関係となる。したがって、だまされた相手はそれと気づいた段階で、これをあばこうとする。つまりそれは〈だます—あばく〉関係でもある。

ところが場の力によって陥る迎合的なうそでは、そうはならない。何しろ場の圧力に負けてうそをつかされてしまったのである。このとき周囲の人はだまされるのではない。

さきの同調実験の場合などは、周囲の人々はただのサクラで、被験者がどう反応しようと直接には何も言わないのだが、それでも被験者はそこに無言の圧力を感じる。ましてそこで周囲の人々がほんとうにひとつのことを一致して確信し、それを当人に積極的に求めているとすればどうであろうか。うそでも、その場の確信に合う方向のものは、おのずと周囲から支えられる。このうそはむしろ〈そそのかされ〉、〈支えられる〉のである。

取調官たちが、捕らえてきた被疑者をほんとうの犯人だと確信して取り囲んでいるとすれば、そこでの自白は、うそであるとほんとうであるとかかわらず、周囲から支えられる。もちろん被疑者が真犯人ならばそれで問題はないかもしれない。しかしそれが無実の被疑者だとしても事態は同じ。つまりうそでもその場の圧力にそうものは、あばかれるどころか支えられる運命にあるのである。

<中略>

### 周囲の確信とうそ

こう考えてきたとき、うそはそのうそをつく当事者の問題である以上に、うそをあばこうとしたり、あるいは結果として逆にそのうそをそそのかしてしまう周囲の関係の場の問題であることに気づく。

とりわけ注目しなければならないのは、追及する側が抱く疑惑の深さである。事件への関与—非関与を五分五分で疑っている程度であれば、相手の言い分をそれなりに汲むことができる。しかし疑惑がほとんど確信の域に達していれば、まったく聞く耳をもたないということにもなる。そうなると疑われている当人が自分の真実を言い通すのは容易でない。追及する側と追及される側のあいだに力の落差があればなおさらである。

そうはいっても事柄の真実を一番よく知っているのは本人ではないか。周囲がどれほど確信をもって追及しても、それだけで自分の真実が揺らぐことはあるまいという人がいるかもしれない。しかし現実はその理屈どおりにはいかない。黑白の決着をつけなくてもよければ、対立は対立で、その場を終えることもできる。しかし人はしば

しば決着をつけざるをえない場面に追い込まれる。そのとき追及する側が折れるか、あるいは追及される側が折れるか、最後に事を決するのは、その場を支配する力の強さである。

しかも追及する側は、おおくのばあい、問題の出来事に立ち会った当事者ではない。取調官などはあくまで第三者である。その第三者でしかない人間が、根拠もなく物事を確信することはないだろうと思われやすい。しかしこれまた、現実はその単純でない。人はどのようなときに確信をもつかを考えてもらえばよい。私たちは素朴に、握っている証拠がたくさんあるほど確信は強くなると考えやすい。しかし現実の事例をみればすぐにわかることだが、人の抱く確信の強さはかならずしも証拠の強さに比例しない。

<以下略>

浜田寿美男著『自白の心理学』（岩波新書、2001年）より抜粋。縦書の原文は横書とし、出題に必要な限りで改編した箇所がある。

## D 日程 商法：出題趣旨・解説・講評

### 《出題趣旨》

問題文 A は、記憶とはいったいどういうものなのか、また人の語りを通して現れる記憶の生成過程とはどういうものなのかということを経験的に分析した著作の抜粋です。問題文 B は、そのような心理学の知見に基づいて、刑事裁判を見据えて、虚偽自白が生まれる過程とその要因を経験的に分析した著作の抜粋です。

問題文 A と B とを合わせるとかなりの分量の文章となりますが、いずれの文章も表現は平易であり、内容は論理的です。もっとも、両問題文の叙述を突き詰めていくと、それでは人の記憶と語り（供述）を通して果たして真実を解明することができるのか、また、どのようにすれば真実を解明できるのかという問いかけにつながりますから、両問題文で提起されている問題領域は広く、深いことにも留意していただきたいと思えます。

【設問 1】は、問題文 A で説明されている経験的分析の内容を正確に理解しているかどうか、そして、その内容を的確にまとめて文章として表現できるかどうかを問う問題です。【設問 2】は、問題文 A の経験的分析内容の正確な理解を前提として、うそが生み出されるプロセスとその仕組みをそのような経験的分析からどのように論理的に説明できるのかを問いかけた問題です。

【設問 1】と【設問 2】を通して読解力と論理構築・展開力を確認することを意図しました。

### 《設問 1 の解答例と講評》

（解答例）

記憶は記録、保持、検索、再生の各過程を経て語られるが、このような記憶の各過程では、さまざまな要因によって記憶違いや記憶のゆがみ、誤った表現等の変容が生じる。しかし、テープの比喻では、記憶の生成の各過程は機械的過程と捉えられて変容は生じないと考えられることになる。ここにテープの比喻の第 1 の落とし穴がある。もっとも、テープも人が操作するものだから同じような変容が生ずることがあるといえるから、テープの比喻で記憶の生成のシステムを説明することは可能だともいえる。しかし、記憶は過去の痕跡が人の内的な心理空間に表象としてあらかじめ存在しているというようなものではない。記憶はそれが生成される状況とそこに所在する主体との相互作用の中で生成するものだと捉える状況的認知論の立場に立って考えると、記憶はそれが語られる特定の状況に依存して、いま、ここに立ち上がるものだと捉えられることになる。そう考えると、テープの比喻では記憶の生成システムを説明できないことになる。ここにテープの比喻の第 2 の落とし穴がある。（約 440 字）

(講評)

問題文Aは、人の口を通して言葉として語られる過去の記憶の生成システムを心理学的に分析したもので、それはまた虚偽の記憶が語られるプロセスを心理学的に解明したものであることができます。問題文Aで述べられているテープの比喻を使った記憶とその生成過程の説明は、一見説得的であるようにみえますが、問題文Aでは、記憶の本体とは何かという点を心理学的に分析することによって、テープの比喻による常識的理解には落とし穴があることが説明されています。設問1は、問題文Aのそのような説明の論理的脈絡を正確に理解して、その理解を文章で的確に説明できるかどうかを確認しようと意図した出題です。

テープの比喻の第1の落とし穴については多くの答案が的確に説明できていたが、第2の落とし穴については的確に説明できていない答案がみられました。この点について、問題文Aによれば、記憶の本体を過去の痕跡が人の内的な心理空間に表象としてあらかじめ存在するものと捉えるのが、旧来の表象主義の立場だと説明されています。これに対して、新しい状況的認知論のアプローチによれば、記憶とは一定の状況下でその状況と主体との相互関係の中で、いま、ここに立ち上がるものと捉えられることとなります。まさにこの点で、状況的認知論のアプローチに立って初めてテープの比喻から離れることができると説明されています。第2の落とし穴について、このような説明の脈絡を的確に捉えて、簡潔にまとめることができているかどうかで、評価に差が出てくることになりました。

## 《設問2の解答例と講評》

(解答例)

「うその関係モデル」によれば、うそはそれが語られる場に所在する人と人の関係性の中で生まれるものである。同調実験が示しているように、うそは、その場に所在する人と人の特定の関係性をもつ同調圧力等の磁力に絡めとられた結果、生成することがあり、この場合、うそは相手から<そそのかされ><支えられる>関係となる。状況的認知論の考え方によれば、記憶は人の内的な心理空間にあらかじめ存在する表象ではなく、記憶が語られる特定の状況に依存して、そこに所在する主体との相互作用を通じて、その状況の下に立ち上がるものと捉えられる。そうすると、記憶が語られる場の特性やそこに所在する人と人との関係性や相互作用によって虚偽の記憶が生成されることがあるというのが状況的認知論の考え方だということであるから、これは、記憶という形で語られるかどうかに関わりなく、うそ(虚偽)はそれが語られる場の特性やそこに所在する人と人との関係性に規定されるという「うその関係モデル」の論理につながる。(約420字)

(講評)

問題文Bは、刑事裁判を見据えて、被疑者が取調べ室の中で捜査官に対して語る自白に虚偽が入り込むプロセスを心理学的に分析した著作の抜粋です。「虚偽＝うそ」ということですから、問題文Aはうその記憶が語られるプロセスの心理学的分析であり、問題文Bはこれをうその自白が語られる場面に応用した心理学的分析であるということが出来ます。

設問2は、問題文Aで説明されている記憶の本体や記憶の生成プロセスについての状況的認知論のアプローチに立ったときに、問題文Bの「うその関係モデル」がどのように説明されるのか、その論理的脈絡を説明するよう問いかけています。設問2は、この意味で、読解力とともに、一定の考え方を前提としてその論理的帰結を説明する能力としての論理構築力や論理的展開力を確認しようとした問題です。

そうすると、設問2に対する解答に際しては、問題文Aで説明されている状況的認知論のアプローチを正確に理解していることが前提となります。しかし、答案には、この点の理解が不正確・不十分なものがみられました。そのために、状況的認知論がどのような論理で「うその関係」モデルに結びついていくのか、その論理的脈絡を説明できていない答案がみられました。また、そもそも「うその関係」モデルの成り立ちを説明できていない答案もみられました。むろん、これら点について一応の説明ができていた答案もありました。

状況的認知論のアプローチと「うその関係」モデルとが論理的につながるポイントは、記憶という形で語られるかどうかに関わりなく、「うそ」というものは「うそ」が生成する一定の場(特定の状況)に依存して、そこに所在する人と人との関係性と相互作用によって規定され生成するものだとする捉え方にあり、この点を的確に捉えることができているならば、設問2に対する解答はさほど困難ではなかったと思われます。そのような説明ができていた答案もありました。

(以上)